



# 中学生の「税についての作文」

本会が後援していた令和2年度中学生の「税についての作文」募集事業(主催:全国納税貯蓄組合総連合会及び国税庁)について、今般、「近畿税理士会会長賞」が選考されました。受賞者の同意を得て、作品を紹介します。

なお、近畿税理士会会長賞は、賞状に副賞を添えて、受賞者が在籍する学校の所在地の支部長から、受賞者に贈呈される予定です。

近畿税理士会  
会長賞

西支部:大阪市立堀江中学校3年、須川あんじさん「僕たちの命を支える税金」  
上京支部:京都市立二条中学校3年、島田美優さん「私達の未来を支えている税」  
兵庫支部:学校法人須磨学園須磨川中学校1年、古川優和さん「新型コロナウイルス感染症と税について」  
奈良支部:奈良教育大学附属中学校3年、山本更紗さん「国と国とを結び税」  
和歌山支部:和歌山市立東和中学校2年、峯村美希さん「限りある税」  
大津支部:大津市立堅田中学校3年、竹中暖貴さん「労働者への新しい税」

## 僕たちの命を支える税金

大阪市立堀江中学校3年1組 須川<sup>すがわ</sup> あんじ



「新型コロナウイルスは現在…」毎日このような報道を僕は耳にする。本当にもううんざりだった。友人と一緒に笑い合ってた登校する日々も、必死に頑張ってきた水泳の部活でさえ、一瞬にして、消えてしまった。今まで当たり前だったことがどれ程ありがたかったのか、僕は思い知ることになった。家庭では、いつもにこやかな母が

僕がいままで見たことのないような表情で、「ごめん皆。お母さんもうコロナのせいでパートでられへんくなってしもうて、皆に我慢させることが増えるかもしれへん。皆でできるだけ協力してほしい。」僕は正直、家計がこんなに追い詰められているとは思像していなかった。母は毎日僕たちに心配をかけさせるような言動はせず、文句も言わず、夜中も働いていた。僕は自分の家庭のことを知らなかったのだ。どれだけ僕たちの家族が生きていく為にお金が必要なのかを。僕はまだ中学生なので、アルバイトをして家計を支えることなど、到底できるわけがないのだ。自分の無力さを感じた。できるだけ母と父の手助けになればと、休校中の間は家事をいつも以上に手伝った。

そんな日々が続いたある日、母はいつもより明るい声で「給付金がでるかもしれない。助かった。」母の明るい声を聞いたのは久しぶりだった。僕は母の笑顔が好きだ。とてもうれしかった。初めて、お金の大切さ、当たり前の日常がどれ程ありがたかったのだったのか知った。母だけではなく、もちろん僕の周りの人々にも笑顔が咲いていた。国が僕たち国民に水を与えてくれた。これで前の日常への道しるべが見えたような気がした。

しかし僕は疑問に思ったのだ。父や母は働いてお金を得て僕たちを育ててくれている。一体、国はどこから僕たちに配るお金を生み出しているのだろうか。お金は湧いて出るものではない。誰かの努力で生み出されているのである。その答えは僕たちの身近である税金のおかげだった。税金は国民の協力のたま物なのである。税金は給付金のみならず、様々なところで利用されている。僕たちの命が侵されている時、電話一本で、救急車や消防車、警察がすぐに助けにきてくれる。生活に困きゅうした時、「生活保護」という制度が命を助け、仕事を支援してくれる。日本で餓死を聞かないのは税金が僕たちを助けてくれているからだ。税金は人々の、僕たちの命を支えているのだ。

税金は年齢に関係なく、もちろん中学生の僕も払っている。消費税だ。皆、税金によってお互いの命を支えあっているのだ。僕の命をみんなの命を大切な命を守るために。